

市民が支える新しいまちづくり、

歴史文化遺産の見える化と保存と活用、復元に向けて

2018(平成30)年7月8日

理事長 小竹直隆



本年、文化財保護法等の改定が行われ、文化財による歴史文化まちづくりの各地での取組みが一層のスピードで進められようとしております。

隠れた文化財の掘り起しや歴史的建造物の改修や活用を進め、京都二条城の収益向上の事例にみられるように、観光資源にし、地域の活性化に繋げることが目的とされています。

「国宝の消滅」を書いたデービット・アトキンソン氏は、文化財の「冷凍保存」からの脱却を、「保存と活用は車の両輪であり、バランスを意識せよ！」と述べられ、西村幸夫教授は「これからは活用の時代だということを法的に示す大事な一歩となった。新しい仕事生まれる可能性もある。」と述べておられます。

(日経アーキテクチュア2018年5月24日号「稼げる保存」)

首都東京には、幾たびの戦災を通して、多くの先人達に、たゆまず守られてきた多くの歴史文化遺産があります。そこには、新たな復元にはない魅力と価値があり、今こそ、数百年後を見通した「保存と活用」に着眼した取組みを進める必要があります。

同時に、江戸城・城下町の歴史文化を伝える為の、必要で重要な歴史的建造物、例えば、本丸御殿、天守、玄関、大広間、白書院、黒書院、能舞台、松の廊下、石垣、濠、城門などの復元や活用などのあり方を検討して、その実施に向けて活動して参ります。

その為には、世界遺産に匹敵する皇居東御苑周辺にある江戸城や城下町を再評価し、それらの今日的意義を明確化することにより、江戸以来蓄積され、潜在化している莫大な歴史文化遺産を、市民の虫の目と鷹の目で見える化する「新しいまちづくり戦略」が必要であると存じます。

近年は、旧江戸城・城下町の多様な歴史文化資源の存在を通して、大小の市民コミュニティやNPO、官民の協働により、それらの資源を活かした多くのまちづくりが、持続的に展開されています。既に、当会と市民活動の皆さまとの交流をさせて頂いております。

江戸城再生とは、単なる箱ものづくりではなく、歴史的文化的空間として再整備することです。

旧江戸城・城下町の歴史文化資源を活かしたまちづくりとの価値観を共有し、ゆるやかに連動するネットワークの形成は、より一層の相乗効果を発揮する、江戸城・城下町の再生の事業と運動となると考えます。

歴史上、初の本格的な学術・調査、検討、提言事業とし、「江戸・東京歴史文化ルネッサンス5カ年基本計画(案)」の始動に向けて、2018年7月セミナー「江戸城の見える化」等をキックオフとし、開催致します。どうか、皆さま、お誘いあわせの上、ご参集いただきますよう、お願い申し上げます。

(機関紙第2号より)